

<韓國音樂 3>

禮樂思想、雅樂整理、井間譜、宗廟祭禮樂、掌樂院、民間音樂の隆盛、
文廟祭禮樂、壽齊天、歩虚子、歌曲、パンソリ、散調、時調

1. 朝鮮(1392-1910):

朝鮮は儒教の理念で國家を設立し、音樂を國家統治に必要な手段として認めながら重要視した。儒教的思想は禮とあわせて樂を重んじて考えたためである。特に政治の應用において樂はとても重要である。その中でも雅樂はとても重要なものであった。このように禮と樂を重要視する思想を我々は禮樂思想と呼ぶ。儒教的統治理念を持つ朝鮮は高麗とは違い佛教を排斥したが、音樂は高麗の音樂をほとんどそのまま受け入れた。しかし、高麗音樂の多くが男女間の愛を詠んだものであったため、朝鮮人たちは音樂はそのままにし歌だけを品位の高い儒教的原理によるものにかえるしかなかった。そして高麗末の不完全な雅樂は整理されないわけではなかった。こうしてそれらは多くの高麗郷樂の歌だけを手直しし雅樂を整理した。その中でも世宗大王(1397-1450)の雅樂整理の業績は最もめざましいものであった。

世宗は朴堧(1378-1458)に雅樂を整理するよう命じて、この整理された雅樂は宮中の行事に廣く使われた。中國の雅樂よりもさらに完全で昔の音樂に近いものとして知られているこの雅樂は不幸にも20世紀はじめに入り宮中行事と祭祀がすべて無くなったために、今はただ孔子の祭祀に使用された文廟祭禮樂の一つだけが演奏されている。そして現在の文廟祭禮樂は東洋で最も古い音樂の一つと知られている貴重な音樂である。

世宗は雅樂を整理しただけではない。彼は数多い樂器を制作し樂譜と音樂理論の書籍を刊行するに至った。そして彼自身も音樂書籍を耽讀している。そして現代の學者たちは彼を音樂學の基を最初に韓國に記録したものだとして評している。それだけでなく、彼は作曲にも長じ、彼が作曲した多くの作品が現在まで樂譜として伝えられ演奏されている。現在、演奏されている音樂の中で「ヨミンラク(與民樂)」、「ポッテッピョン(保太平)」、「チャンデオプ(定大業)」は代表的な曲である。そして彼は高麗と朝鮮初期まで使用した不完全な樂譜に不満を持ち使いやすい井間譜を創案したりもした。

この井間譜は前に述べたように今でも使われている樂譜で東洋最初の本格的な樂譜である。井間譜の創案、作品の制作活動、雅樂の整理、音樂學の基礎になった音樂理論書の發行以外にも彼は民謠まで採集し、韓國音樂の音組織の基礎になる律管を製作し、これにより調律體系を確立した。また、優れた音感を持つ彼は他のすべての政治的、軍事的、文化的、音樂的治績で韓國の歴史上最も優れた王として尊敬を受けている。

世宗の子である世祖(1417-1468)は多くの政治的弱点を持つ王であったが、文化的には相当な業績を残した王である。その中でも音楽に関する業績は少なくない。彼は世宗の井間譜をより使いやすく改良し、「ポッテッピョン(保太平)」、「チャンデオプ(定大業)」の音楽を編曲した。このように編曲されたこの2曲はやがて歴代朝鮮王の宗廟祭禮樂として使われ、この宗廟祭禮樂は今でも当時とそれほど変わらない演奏がされている。

朝鮮第9代王である成宗(1457-1494)もまた音楽の貢献した王である。彼は音楽の百科事典的な「樂學軌範」を発行し、この書は後代の音楽に絶対必要な指針書となった。朝鮮音楽の研究に必修不可欠なこの書は後代に幾度にわたって再発行された。

16世紀以後は政治的に朝鮮が多くの混戦を経ながら宮中音楽も次第に燦爛とした姿を失いはじめた。特に16世紀末と17世紀はじめの約40年の間に壬辰外亂と丙子胡亂の大きいいくさを経ながら樂器と樂書は焼失し、音樂人たちはばらばらに散らばり音樂の姿は言葉にならないほどとなった。その上英祖(1724-1776)と正祖(1752-1800)代に至って宮中音楽はある程度復興兆しが見えたが、15世紀はじめ世宗から15世紀末の成宗に至るその華麗だった姿を再び探し求めることができなかつた。そうして朝鮮末期の姿はさらに萎縮していくしなかつた。國家を日本奪われた以後の宮中音楽は見るべき價値が無いものになってしまった。

しかし、壬辰外亂と丙子胡亂以後の朝鮮音楽は新しい變化の動きを見せはじめた。「ボホジャ(歩虚子)」や「ナギャンチュン(洛陽春)」のような中國界の唐樂が中國的なスタイルから脱し、韓國音樂化されていった事實とコムンゴ(거문고)の調律體系と以前とは異なる新しいスタイルを見せはじめた事實等は、こうした動きの確實な證據となる。このように朝鮮音楽内部の動きは人為的に起こったものではなく、自然と起こった音樂的事件である。このように中國音楽が韓國音樂化され、コムンゴの調律體系が變つたこの時期の韓國音楽は弄絃法を持つようになり、禮典より粹と味を一層誇る音樂への方向轉換をするようになった。

朝鮮の國家的音樂機關は國家が初めて設立された年である1392年に既に設置され、前の時代の傳統を繼承することができた。新羅、高麗とは違い様々な音樂機關において任された朝鮮音楽行政は1469年に至り一つの統合された機關により行われるようになった。掌樂院は時代によって若干の變化はあつたものの、朝鮮末まで存続しすべての音楽に関する業務を請け負つた。以後、掌樂院の傳統は日帝時期と解放後の混戦期を経て1951年に國立國樂院に至つた。

一方、朝鮮中期以後は新しい音樂的兆しが生じたが、宮中音楽の衰退とは違い、民間音楽の發生と隆盛があつた。勿論、民間音楽はそれ以前のどの時代にもあつたが、この時に至り記録上明確に見られるようになった。

まず、兩班階層による歌曲と歌詞、詩調の登場である。時にはその起源を高麗の郷樂に置くこともあるこの音楽は朝鮮中期以後、はっきりとその姿をあらわし現在に至るまで發展してきた。ソンビたちはゆったりとした時間を見つけこれらの音楽を楽しみ、この音楽はコムンゴの樂譜へ

と収められた。こうして朝鮮中期以後、彼らが楽しんだ音楽の痕跡であるコムンゴの楽譜が数えきれないほど発刊されるようになった。この中でも歌曲を収録したカムンゴの楽譜は無数に多く、これらの楽譜は韓国音楽史にきわめて重要な資料を提供している。国家主導により発行された楽譜とは性格が異なるこの楽譜は、體系の統一性は無いものの、当時の音楽現状を水平的にまた垂直的に窺えるものである。

次は韓国の聲楽曲で重要な位置を占めているパンソリ(판소리)の登場である。おおむね、英祖代に発生したものと知られているパンソリを歌曲流の音楽とは異なり、平民や一般大衆が楽しんだ音楽である。優れた聲樂的技巧を必要とするパンソリは時代を重ねるほど名唱を重ね輩出しながら、その音楽の質と量を増していった。パンソリの名唱は他のいかなる音楽でも見られない大變な修練過程を経つつ、それらの藝術性を育てていく。はじめは一般庶民、大衆たちが楽しんだ音楽として出発したが、兩班たちの庇護を受けはじめパンソリの人口は急激に増えて、これと比例して藝術的音楽として確かにその地位を築くようになった。こうしたパンソリ愛好家たちの中で最も代表的な人物は大元君(1820-1898)で、彼の執權時代にはかなりパンソリの天國だったといえる。しかし、このパンソリも日本によって國を奪われた以後、一時はようやく命脈だけは受け継がれた。すべて 12 曲、すなわち 12 場面(마당)の音を持ったパンソリ音楽の中で現在は 5 場面だけが歌われている実情である。

パンソリは 20 世紀はじめに至っては演劇の影響で唱劇を派生するに至った。パンソリとは違い、様々な歌手が配役を持ち舞臺仕掛けをする唱劇は一時ものすごい人気を得たが、今は国立唱劇團によってかろうじて命脈を維持している。

パンソリや唱劇は優れた藝術性を持つ聲楽曲である。しかし、歌を歌うこれらが大部分無識な人々のせいで之に関する記録を手にするには難しくなった。その中でも特に楽譜として記録されたものは最近に採譜されたもの以外には全く手にするのが不可能で、その歌だけを収めた本だけがちらほらと見られるだけである。

最後に散調音楽がある。前で述べたようにパンソリとともに巫樂から出発した散調は即興的な獨奏曲で約 100 餘年前に生まれた。伽倻琴による散調で出発したこの音楽は、後に諸名人によって、コムンゴ、奚琴、大琴、笛などによる散調によって擴大していった。獨奏者の優れた技術と即興演奏の能力が要求されるこの音楽は民俗樂の一つとして出発したが、今は立派な藝術音楽として認められている。しかし、この音楽もやはり楽譜として記録されたものは最近に採譜されたいくつか全部である。

パンソリと散調、そして歌曲類の音楽以外にも朝鮮の音楽史には多くの音楽が見られる。

1939 年は韓国の音楽史の中で最初に西洋音楽の影響を受け、西洋の 5 線楽譜による作曲が行われた年である。西洋式管絃樂法によって作曲された最初の作品以後から今まで、數百曲以上の作

品が発表された。時には伝統的手法で、あるいは西洋式手法や前衛的手法で作曲された作品には伝統的な韓国音楽の世界とは全く異なる音楽の世界を持っているものもある。しかし、韓国の楽器を第一に作曲するだけですべて韓国音楽として取り扱っている。このように音楽には西洋式の楽器配置法と洋服を着る指揮者まで登場する。そして西洋音楽と同様に重奏曲、協奏曲として作曲され、西洋楽器と同様に演奏されもする。大学ではこうした作曲法を教えながら新しく作曲されたこうした音楽の演奏を必修科目にしている。

結論的にはおおよそこのような歴史をもつ韓国音楽は現代に至り、過去よりはるかに恵まれた環境の中にあるのは事実である。宮中音楽の伝統に民俗楽まで受容した国立國樂院は韓国音楽の保存と普及に最も重要な國家機關である。各大学での韓国の音楽研究が普及または活潑になれば韓国音楽の将来はとても希望がある。

しかし、不幸にも 20 世紀以後西洋音楽を中心に各學教の音楽教育がなされており、社會的な雰囲気も西洋音楽主體のため、韓国音楽に対する關心と理解度が未だ低いといえる。

2. 韓国音楽に使われる楽器

現存する韓国音楽に使われている楽器は約 60 余种に達する。しかし、この楽器が現在すべて使われているのではなく、その中の一部だけが使われている。現存する楽器は雅樂、郷樂、唐樂により雅樂器、郷樂器、唐樂器に分類されたり、また打樂器、管樂器、絃樂器に分類されたりもする。そして時にはカート・サッチス (Curt Sachs) の分類法により弦鳴、膜鳴、體名、氣鳴の楽器に分類される。

韓国楽器を作る材料は金属、石、木、絲、ひさご、革、竹、土などの 8 種類である。これらを韓国音楽では 8 音と言ひ、この 8 音によって分類される。この 8 音により楽器には東洋哲學的な深い象徴が込められている。

それでは韓国音楽に使われる楽器の形とその音を視聽覺資料を通して確認してみよう。

3. 鑑賞および實習

これまで私たちは韓国音楽に対する簡単な理論と特徴、そして歴史を調べてきた。音楽の理解のために文獻的事實をもとにした講義は必要な課程であるが、實際の音楽に接してみなければその理解はあまり價值はない。

文廟祭禮樂：

文廟祭禮樂は前で述べたように孔子の祭祀のための音楽である。しかし、孔子以外にも孔子の立派な弟子たちと古代中國の優れた儒教哲學者たちと韓國の儒教哲學者たちを同時に祀って祭祀を行う。1 年に初春と初夏を 2 度にわたり行うこの祭祀では音楽と併せて踊りが伴う。この踊りは佾舞と言ひ、すべて 64 名が 8×8 列に並んで立ち踊りを踊る。嚴密にいうと、中國音楽で中

國式雅樂の眞髓を見せている淡白な音樂である。この音樂は一つの句が4音で構成されていて音樂のはじめと終わりが極めて特徴的だ。

宗廟祭禮樂:

歴代朝鮮王を祀り、祭祀を行う際に演奏する音樂である。前で述べたように世宗大王が作曲し世祖が編曲した音樂である。禮典には1年に4度祭祀を執り行うが、今は毎年5月の第一日曜日に一度宗廟で行われる。これは中國式雅樂の影響を受けたが、韓國の獨特な味わいをそそる神秘的な雰囲気の音樂である。管絃樂とあわせて樂章という歌が伴い、これもやはり64人の佾舞がいる。

壽齊天:

韓國の雅樂曲の中で最も打つ音樂である。もともとは歌詞を持つ聲樂曲であったが、現在は伎樂として演奏されるだけである。歌詞は百濟時代に完成していたが、音樂は高麗時代のものである。王世者の舉動に使われた音樂で不規則な長短である。

步虛子:

高麗代、中國宋から傳わった音樂であるが、今は完全に韓國の音樂へ變った。王世者が宮闕の外へ出るとき主に使われ、舞踊の伴奏音樂としても使われた。

歌曲:

朝鮮中期以後、兩班たちが楽しんだ音樂で、管絃樂の伴奏を伴う聲樂曲である。前奏と間奏、あるいは後奏を持つ曲で、男女が別々に歌ったり、互いに交代して歌ったりもする。

パンソリ:

歌手一人が鼓手の太鼓のリズムに合わせて敘事的な内容の長い話を身振りを交えながら歌を歌う。歌聲と對話調のせりふ、そして身振り手振りで構成されている。

散調:

チャングや太鼓の伴奏による即興的伎樂の獨奏曲で、韓國音樂で最も難しい音樂的技巧を發揮している音樂である。チニャン(진양), チュンモリ(중모리), チャジンモリ(자진모리)等の主要リズムとさまざまなリズムで構成され、遅い한 배から速い한 배で音樂が進行される。各リズムはリズム名になっていたり、該當樂章を意味する。しかし、リズムと章と章の間には休みなく進行し、一番最初のリズムは變奏がなく基本リズムによって行われる。

詩調:

歌曲と同じ歌詞を持つが、伴奏がないアマチュア的な音楽で、歌曲とは音楽の形式が異なっている。普通、歌曲は 5 章で構成されているが、それと反して 3 章で成り立っている。

- 1 朝鮮の開国が音楽に及ぼした影響について話してみましょう。
- 2 朝鮮前期の音楽の業績にはどんなものがありますか？
- 3 朝鮮後期の音楽的变化について話してみましょう。
- 4 気に入った音楽を選んで鑑賞を述べてみましょう。

この時間では韓国音楽 3 について学習をしました。

この時間では韓国文学 1 について学習をします。

お疲れさまでした。